

聖書:テサロニケ人への手紙5章1~11節

説教:光の子どもです

はじめに

最近、大きな自然災害のニュースを頻繁に聞くようになりました。ついこの間は千葉県を襲った台風の災害があり、また九州では五十年に一度あるかないかという大雨が降る。北海道の夏も以前ならば最高気温が三十度を超しただけでニュースになっていたのですが、今は当たり前の光景になってしまいました。これらは地球温暖化によるものと言われ、このまま行けば百年後には平均気温が四度上がるとも言われ、いったいどうなるのかと不安になります。

気象のことばかりではありません。高い地位にある人が激しいことばで差別的な発言しても非難されるどころか拍手喝采され、生産性のない人は生きる資格がないかのような発言がどうどうとされる。人々の心がますます冷たくなっていることを感じます。いったいこれからどうなるのか。やはり世界の終わりの日が近いのではないかと不安になります。それで世間では、「〇〇の大予言」とか「2020年世界はこうなる」というような情報が飛び交ったりするのでしょう。

今日開いている聖書の箇所は、一見するといまの私たちとほとんど関係がなさそうにも思いますが、実は共通点がある。その共通点は何であったのか。そしてそこからでは私たちはどのようなことを教えられるのか。そのことを見てまいります。

1 テサロニケ教会の信仰

テサロニケを訪れたパウロがそこで福音を語り、多くの信者が起こされて教会が建てられました。これを見て苦々しく思った町の人々がパウロに激しい迫害を加え、とうとう彼は街から追われてしまい、教会は始まったばかりなのに指導者が不在という状態になってしまいます。加えて、パウロを追い出した町の人々は次に教会を迫害していきます。生まれたばかりの教会が苦難の中になりながら信仰を守り通していけるのだろうか。誰もがそう思うはずです。もちろんパウロも心配して、なんどもテサロニケに戻ろうとするのですが、どうしてもできなかった。そこで一緒に働いていたテモテをテサロニケに派遣し、様子を見てきてもらうことにします。やがて戻ってきたテモテは次のような報告をしました。

テサロニケ教会は信仰を固く保ち、御子が天から来られるのを待ち望んでいて、それは近隣の人たちの模範となるくらい素晴らしいものであった。ところが、そのことに関して問題が起きていた。主の再臨を強く待ち望むあまり、目の前の生活はどうでもよいと考え、働くのをやめてもいいというような極端な考え方が現れたというのです。

2 主の再臨の日

1) 突然の破滅が彼らを襲う

パウロはこれこれ聞いて手紙を書くのですが、今日の所を順を追って見ていきます。まず3節。「人々が、「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」

世界の終わりの日は必ず来ます。聖書ではその日のことを主の再臨の日、終末、あるいはさばきの日とも呼んだりします。その日はまさか今来るはずがないと思っているときにやって来る。突然の破滅が彼らを襲う。それも、絶対に逃れることができないという厳しさです。

ここに「破滅」と書いてあるので急に恐ろしくなった方もいるでしょう。いったい誰の上に破滅が臨むのでしょうか。「彼ら」と書いてある。「彼ら」とは誰か。この後を読み進めると「夜の者」「闇の者」と呼ばれている人たちを指す。すべての人たちが破滅に至るわけではありません。でも、3節の最後に「それを逃れることは決してできない」とあります。これはどうなのか。安心していただきたいのですが、あくまでもこれは「彼ら」と呼ばれる人たちのことであって、すべての人たちのことを指しているのではない。

2) 「彼ら」とはだれか

そうすると次の疑問に至ります。いったい「彼ら」、すなわち「夜の者」「闇の者」とは具体的にどんな人たちのことなのか。パウロが、「夜の者」「闇の者」についてどんなことばを使っているのでしょうか。「平和だ、安全だ」と言っている人たち。暗闇の中にいる人たち。眠っている人たち。酔っている人たち。そして、御怒りを受ける者たち。ざっとこんなところです。

主が再臨される日とは、主がこの世界を完全にさばく日で、その日、御怒りを受ける者たち、す

なわち「闇の者たち」、罪ある者たちがさばかれます。

「さばき」と言うと不安に思う方もいるので補足します。「さばき」があるということは決して恐ろしいことではなくて、むしろ私たちの希望なのだと思います。皆さんは、悪いことをした者がいつまでもさばかれないで、やりたい放題にしているのを見たらどう思いますか。不公平だと思うでしょう。そして、不公平なことがこの世界には一杯あるわけです。神は悪い者をさばくべきだと皆願っている。まさにその願いが成就する日が、さばきの日です。ですから希望の日です。

しかし、これは諸刃の剣です。聖書によれば私たちは生まれながらに全員有罪ですから、そのままでは「闇の者」「夜の者」であって、突然の破滅を味わわなければならなくなる側にいたわけです。もちそん、そのままではいいはずがない。ではどうすればいいのか。

3) いつ

そのことを見ていく前に、主の再臨、さばきの日はいつなのかについて触れておきます。テサロニケ教会が躓いたのはまさにこの点でした。最初は「将来いつか」と言っていた人たちが、だんだん極端になっていき、「来年だ」、「いや数ヶ月後のことだ」と具体的な日にちを言い出した。

でもパウロはこう言っています。2節。「主の日は、盗人が夜来ようように来ることを、あなた方自身よく知っているからです。」泥棒がいつ家を襲ってくるかは前もってわかりません。わからないので、泥棒という稼業がなりたつわけです。それと同じで、この世界の終わりの日、主の再臨の日は、いつであるのかだれもわからない。よく週刊誌や本のタイトルで、「2XXX年世界の終わりが来る」というような見出しがありますが、あれはすべてうそということになります。惑わされてはいけません。

2 光の子ども

1) 暗闇にいる者 眠る、酒に酔う

ここを読んでおわかりのように、パウロは二つの種類の人たちのこを挙げております。一つは先ほども触れた夜の者、闇の者と呼ばれる人たち。もう一つは、光の子ども、昼の子どもと呼ばれる人たち。私たちが一番知りたいのは、自分は昼の者なのか、そうでないのかという点でしょう。いつたいてどこで区別されるのか。その説明は6、7節にあります。「ですから、ほかの者たちのように眠っ

ていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。」

2) 昼の者 目を覚まして、酔っていない(身を慎む)

どうしてここで酒の話が出て来るのか。パウロが何を言いたいのかつかみにくい。皆さんの聖書で6節の「身を慎んでいきましょう」のところに米印が付いているはずですが。欄外の説明を見ると、「直訳「酔わないで」と書いてある。

このポイントは、「身を慎む」とはどんなことか。8節でもくりかえしていますからよほど重要なことのように見えます。それがわかれば、後は全部忘れてもよいくらいです。

そのことを解説する前に、ここで誤解のないように一言付け加えておきます。パウロは、「お酒を飲んではいけません」と言っているのではない。ではなんのことか。

テサロニケ教会の人たちの問題に目を留めていくと、自然に見えてきます。彼らは、再臨の日は近いと言って、徐々に極端な方向に走り、働くことをやめてしまいました。それが信仰深い行いであるかのように考えた。でも、先ほど言ったように、主の日は、夜盗人がやって来るように来るのですから誰もわからない。ひとことで言えば、テサロニケ教会のやっていることは、地に足が付いていない。現実からかけ離れた空想話をしていて、まるで酒に酔っている様子とよく似ている。だから、「酔う者は夜酔うのです」という表現が出て来る。

では、「身を慎む」とは何か。身を慎むと聞くとどんなイメージを想像したでしょうか。最初は、派手な生活をしてはいけません。やりたいことを我慢して、あれもしなければこれもしない。なんだか息の詰まりそうな生活です。

パウロが言おうとしたことは、全く別です。テサロニケの人たちは、苦しや不安が高まったとき、まるで酒に酔うようにして空想話にふけり、主の日は明日だ明後日だと叫んでいた。それこそ、身を慎んでいない生き方だった。でも、あなたがたはそうではない。たとえ天変地異が激しくなろうとも、人々の心が冷たくなっても、地に足をつけていつもと同じように歩みなさい。それが身を慎むという生き方だ。わかってしまえば実にシンプルな結論です。

3 イエスの教え

でも地に足の着いた歩みとは何か。もっと具体的に教えて欲しいと言う方もいるでしょう。そこで最後に、主イエスがどのように教えておられたのかを確認します。

マタイの福音書25章31節を開きます。ここには、主の再臨の日の様子が書かれています。イエスは人の子が栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着いて羊を右に、やぎを左に置き、右にいる者たちにこう語ります。今日の箇所には照らせば、やぎとは「闇の者たち」、羊とは「光の子どもたち」と言っていいでしょう。34節。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世界の基の据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。」いったいだれが右に置かれたのか。36節。「わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに尋ねてくれた」人たち。それを聞いた人たちは、頭をひねって「そんなことをした覚えがない」と言う。イエスはこう答えた。40節。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さな者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」

羊たちが忘れてしまうほどのことを、イエスは覚えておられた。いったいどんなことだったのか。覚えていないのですから、なにか特別のことではなくごく普通ことということになります。

例えばこうです。皆さんは、親しい友人が病気だと聞けばお見舞いに行きませんか。行きますよね。その人のために祈るはずです。困っている人がいれば、そばに寄って一緒に話を聞きくこともある。肉親をなくした方がいれば、一緒に泣いて故人を見送るでしょう。これは当たり前のこと。神さまのために何かをしたという意識はありません。

でも、これこそが実は、地に足をつけた、身を慎む歩みであった。なんのことはない。普段私たちがしていることそのままです。

やがて主の御前に出るとき、私たちが何気なく当たり前のようにしてきたことを、主はことさらに喜んでくださって、「あなたは光の子どもです」と呼んでくださり、聖なる者としてくださる。その約束を信じながら、また私たちは浮き足立つことなく、前に歩み出したいと願います。